

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援 ゆあてらす		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 20日		～ 2026年 3月 18日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	9人	(回答者数) 6人
○従業者評価実施期間	2026年 2月 20日		～ 2026年 3月 20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5人	(回答者数) 5人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 23日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	毎日欠かさず実施している支援前後のミーティングや日報の活用により、全職員が子どもたちの状況をリアルタイムで共有しています。これにより、個別支援計画に基づいた一貫性のある療育をチーム体制で提供しています。	6ヶ月ごとのモニタリングに加え、日々の送迎時や対話を通じたインフォーマルなアセスメントを大切にしています。ご家族の最新の意向や、子どもたちの細かな変化を即座に支援内容へ反映させるプロセスを習慣化しています。	利用児童の特性や人数に応じ、基準を上回る手厚い配置を検討し、スタッフ一人ひとりが余裕を持ってお子様に目を配り、質の高い支援を継続できる体制を維持します。
2	5領域に基づいた活動を公表・実施し、余暇時間等にはお子様自身が一覧から活動を選択できる「自己決定支援」を実践しています。	週に1回程度のペースでブログ(LITALICO等)を更新し、活動内容や事業所の様子を可視化しています。これにより、通所していない時間帯の様子も保護者様へ丁寧に伝わるよう配慮しています。	普段お子様が取り組んでいる療育プログラムを保護者様と一緒に体験する機会を設けます。支援の目的を共有するとともに、保護者様同士が自然に繋がれる場を創出し、家庭と施設の連携を深化させます。
3	あえて仕切りを減らすことで開放感のある空間を維持しつつ、感染症対策や個室の限定的利用など、状況に応じた柔軟な対応を行っています。	死角をなくし、職員全員で見守りができる開放的なレイアウトを採用することで、事故防止と心理的な安心感を両立させています。	開放的な良さを活かしつつ、集中が必要な学習課題やクールダウンの際に、周囲の刺激を遮断して落ち着ける「個別活動スペース」を可動式パーティション等を用いて整備し、より個々の特性に合った環境を整えられるよう検討します。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	開放感のあるレイアウトを優先しているため、視覚・聴覚的な刺激を遮断して集中できる場所や、情緒が不安定になった際に一人で落ち着けるクールダウンスペースの確保が十分ではありません。	死角をなくす「安全な見守り」を最優先した結果、スペースを区切ることによる「集中できる環境作り」が後回しになっていました。	一律に壁を作るのではなく、活動に合わせて柔軟に空間を区切れる可動式の仕切りの導入を検討し、集中と開放を使い分けます。
2	日々の連絡(送迎時・連絡帳等)は密に行えているが、保護者同士が交流する場や、専門的な情報を組織的に提供する「家族支援プログラム」の実施が追い付いていません。	保護者様の就労状況やニーズが多様化しており、ニーズに合致した開催形態やテーマの選定、運営のノウハウが不足していたことが要因として考えられます。	家族支援の充実を図るため、今後は「体験型保護者交流会」の実施を検討します。療育プログラムを保護者様にも一緒に体験していただくことで、支援目的の共有を図るとともに、共通の体験を通じて保護者様同士が自然に繋がれる場を創出します。
3			